

1 はじめに

フィリピン西ネグロス州ラカルロータ市バランガイ・ラグランハを中心とする、セント・ヴィンセント・フェレール (SVF) 小教区では毎年聖週間¹に少々ユニークなキリスト受難劇「カルバリヨ (Kalbaryo)」²が行なわれてきた。ここでは民衆をとりまく暴力を「意識化」³するコミュニケーションが行なわれ、地域の軍事化⁴に対抗する民衆による自立自存の運動が高揚した。しかし、1999 年以降、カルバリヨの内容、運営の変化とともに、運動そのものの後退がいわれるようになり、人びとは今も暴力との苦闘を強いられている。

カルバリヨの源であるフィリピン土着のキリスト受難叙事詩「パシオン (Psyon)」や、その演劇化である「セナクロ (Senakulo)」についてのレイナルド・イレート (Reynaldo C. Iletto)、ルーベン・アビト (Ruben Habito)、清水展らの先行研究⁵からは、後述するフィリピン史におけるカトリックの民衆に対する二重の機能について貴重な示唆を得た。本章ではさらに、地域民衆の自立自存の闘いとそのコミュニケーション活動の分析を通して、平和をめざすコミュニケーションの要件を考える。

2 開発主義からの脱却

1949 年 1 月、米国大統領トルーマンは就任演説の外交政策第 4 項目 (ポイント・フォア) の計画として、「低開発 (underdevelopment)」地域への技術援助と投資の重要性を提案した。「ディベロプメントが現在のような意味で使われる

のを聞いたのは、この日がおよそ初めてだった」⁶のだ。こうして登場した開発の概念について C.ダグラス・ラミス(C. Douglas Lummis)は 1991 年の論文“Development against Democracy”⁷において development がもともと持つ、種子の中に「包み込まれていた(enveloped)」ものが芽吹くイメージのメタファの力によって、「(経済開発) プロジェクトは自然かつ必然的であり、開発・発展の対象となった存在に正しくまた運命づけられた将来がもたらされると印象を与える」「開発・発展イデオロギー」⁸が登場したと述べた。つまり本来、潜在的实现可能性の展開であった development を、その「メタファを意図的に誤用することで」⁹、環境や文化の破壊、社会関係や共同体の解体、地域の生活手段の強奪と世界市場への隷属のような活動が development と呼ばれ、「それが人間の選択であること、つまり、人間にはそうしない自由がある活動だという事実をおおい隠して」¹⁰しまい、開発する側とされる側双方に受け入れられた。このように、development の概念を乗っ取ったのだともいえる開発主義は、開発が enveloped されたものの自然な展開であるかのような誤解を与えることで、人びとにそれを受け入れさせたのである。

今も多くの人びとは、世界に溢れる飢餓・貧困・疾病などが開発の不足によって起きており、開発によって解決できると信じている。それがうまくできないのは開発のやり方がまずいからという考えである。しかしそのような問題はラミスが指摘したように開発主義の暴力によるものである。したがってその暴力を克服するためには、真の開発を主張して開発のやり方を修正するのではなく、「開発主義からの脱却（脱開発主義）」をめざし「社会の優先目標とされてきた開発の前提化自体を検討し直す試み」¹¹が必要なのである。

3 コミュニケーションが含む二つの相反するベクトル

コミュニケーションは個と共同体において精神・知・思想を伝え、継承する相互行為であり、また共同体と社会制度の形成と維持にかかる相互行為でもあるという点で、内的自然としての身体や自然環境の中での代謝や社会的代謝に相当し、人類を存続させるサブシステム＝生存基盤の一要素である。物質エ

エネルギー代謝が損なわれることで健康に支障をきたしたり、社会的代謝に問題が起こることが公害を生じさせたりするのと同様に、コミュニケーションのあり方によって、人間の社会的関係に問題が生じる。コミュニケーションはサブシステムの一要素ではあるが、実はそのコミュニケーションにはサブシステムを守り回復するベクトルのコミュニケーションと、逆にサブシステムを壊してしまうベクトルのコミュニケーションが同時に存在する。

この相反する二つの方向性を持ったベクトルを、ユルゲン・ハーバーマス (Jürgen Habermas) は「コミュニケーション的行為と戦略的行為」¹²、パウロ・フレイレ (Paulo Freire) は「コミュニケーションとエクステンション」¹³と呼び、筆者は「脱開発コミュニケーションと開発コミュニケーション」と定義している。これは「サブシステム志向で暴力を克服するコミュニケーション（平和コミュニケーション）とパックス・エコノミカ＝経済平和志向で暴力を増やしてしまうコミュニケーション（暴力コミュニケーション）」というふうと呼ぶこともできる。

巨大な構造を背景とした開発主義の暴力に対しては、ある共同体の中で形成された自力更生主体だけで対抗するには力が足らず、暴力の被害者と外部との連帯を意識化して作り出すコミュニケーションが必要となる。

4 ラグランハのカルバリョ

(1) 概要と背景

マルコス独裁体制末期の 1985 年、カトリック教会バコロド司教区は BCC (Basic Christian Community＝キリスト教基礎共同体¹⁴) の展開を目的としたミッションを教区内各地に派遣し、その幾つかは SVF 小教区にもきた。その一つで FCAN (ネグロス芸術家同盟) などによる演劇のワークショップが行なわれた。この参加者のうち、国軍のハラスメントを日常的に受けていた ラグランハ郊外のナガシ (Nagasi) アシェンダ (農園) の青年グループが 1986 年から自主的文化運動として *Taltal* をはじめた。

この *Taltal* (‘釘付け’の意) はその名の通りキリストの最期を表す伝統的手

法による演劇だったが、人びとはキリスト受難（Passion）の姿に現在の自分らの困難な状況を重ね合わせて感銘を受けた。1988年に当時のヴィック・ドゥマラオス司祭（Fr. Victor Dumalos）によって小教区（ただし1994年5月31日以前は小教区より一段階下位の chaplaincy だった）全体の行事としてラグランハに移され、1990年新任のテレンス司祭（Fr. Terrence Nueva）によって民衆の現在の苦難をキリストの受難に関する聖書の記述と重ね合わせて演劇化する Contextualized（文脈付け手法）をとりいれたカルバリヨとして再生された。イースターにキリスト受難劇を上演する場所が多いが、Contextualizedはこの地の独特のものである。

具体的には、Traditional（伝統的手法）と呼ばれるキリスト受難の再現部分として、まずバランガイ中心の広場で「最後の晩餐」から「キリストの逮捕」が演じられる。後ろ手に縛られたキリストを先頭に護送するローマ兵軍団や大勢の出演者らが行列して最も暑い午後に Kalbaryo Hill と呼ばれる丘まで4キロほどの道のりを行進する。先回りして待ち構えている観客も多いが、相当数の観客が出演者の移動に連なって行列する。この丘の麓の第一ステージでキリストの裁きのシーンが演じられ、十字架を背負わされたキリストらは丘の上の第二ステージへ急坂を上る。そしてそこで磔刑までが演じられる。

続いて、十字架上に残されたキリスト役を前にして、Contextualizedによる芝居がはじまる。キリストの十字架上の最後の七つの言葉にちなんで、現代のフィリピン民衆を主人公にした七つのエピソードが演じられる。例年この「テーマ」は Contextualized の内容を表すものでもあるのだが、エリートたちによる違法伐採などの環境破壊による人々の苦しみ、海外出稼ぎ労働者の苦しみ、グローバルゼーションや輸入自由化によるサトウキビ労働者の苦しみ等々、キリストの受難に重ね合わせて、その時々地域の人びとが直面する苦難を示すものである。

このような運動が興った背景は、第一にその植民地化におけるカトリック教会の役割について再確認することからみえてくる。スペインによるフィリピンの植民地支配は、カトリック教会の「宣教の任務」¹⁵と結びつけられて正当化された。しかし一方レイナルド・イレトは、フィリピンの民衆史において、土

着化したキリストの受難叙事詩「パシオン」が植民地支配への抵抗の原動力と解放のビジョンを与えたことを明らかにしている¹⁶。

宣教師たちが救いを分りやすく伝えようとして「パシオン」を演劇化した「セナクロ」を通じて「救いへの道は地上の苦しみを忍び、権力者に対して従順になることである」と教えたにもかかわらず、民衆は逆にキリストの中に改革者、革命家を見だし、パシオンによって自らがおかれた政治的・社会的状況を理解し、「支配者に対する抵抗運動を単発的で地域的にとどまるようなものから、キリスト教の中心教義に基づいた普遍的歴史観をもった解放の闘いへと展開させられるようになった」¹⁷のである。

さらにバチカン第二公会議（1962～65年）以降のカトリックの変化がある。中南米で「自分たちの教会や社会をいっそう批判的な目で見始めた」¹⁸カトリック教徒たちが革命運動に参加し、司教たちによって開かれたメデジン会議¹⁹以後広まった「解放の神学」²⁰はフィリピンにも大きな影響を与えた。ミンダナオ島からミッションを通して伝わったといわれる解放の神学は、バコロド教区へのフォルティッチ司教²¹の着任によってネグロス島で具体化された。

地方語であるヒリガイノン（イロンゴ）語でのミサに加えて、パニンバホン²²と共に「福音を自分たちの共同体の問題に当てはめられる」²³、つまり民衆が神と直接交通して共同体を始められる、自分たちの状況を語る言葉を獲得した。キリスト教基礎共同体（BCC）の組織が広がり、社会正義実現に向けて司祭と信徒が一体となって「貧困」やマルコス政権（1965～86年）からその後のアキノ政権（1986～92年）、そして現在まで連綿と続く地域の軍事化に対抗したのである²⁴。

(2) 民衆のコミュニケーションとしてのカルバリヨ

バコロド教区では社会行動委員会（Social Action Committee = SAC）が設置され、1969年に司教はサトウキビ農園で働くサカダ（*sacada*²⁵）の苦境に言及した司教教書を発行し、社会正義実現に強い意志を示した。SACはネグロス砂糖労働者同盟（Negros Federation Sugar Workers = NFSW）等、貧困者・小農の組織化を支援したため、大地主らは司教が「共産主義者」であるとして敵対した。

1975年に *Alay Kapwa*²⁶が、1977年に BCC が教区の正式なプログラムになり、人びとの信仰と社会正義を結びつけるものとされた²⁷。

バコロド教区で9人の BCC 活動家が次々と行方不明となり、虐殺死体となって発見された1980年、SVFの司祭に叙階したヴィック神父は、周辺のアシェンダ（農園）で暮す人びとの組織化を進めた。そこで前述した経緯によって *Taltal* が小教区全体の行事とされ、さらに後任のテレンス司祭によって *Taltal* はカルバリヨとされ、規模も拡大した。

アシェンダでばらばらに抑圧されてきた人びとは、「貧困」や生活苦は神から与えられた試練と思わされてきた。筆者のインタビューに対してサラマンカというアシェンダで働くサトウキビ労働者の青年の一人は「(現在の困難は) 神の思し召しだから祈るだけです」と答えた。つまりこのような世界において民衆は自分自身を、自分たちの歴史を語る言葉を持たず、支配者のみが言葉を持つ。つまり相手を定義する力（言葉）を持つ者が権力を持つのである²⁸。それに対して、現在の民衆の苦難をキリストの受難にオーバーラップすることによって民衆が自らの言葉を奪還し、自分たちの問題を認識し、民衆自身による歴史の叙述²⁹をはじめめる過程、すなわち人びとがカルバリヨで描こうとする現在進行形の歴史を自らの手で紡ぎだす営為こそ民衆自身の「意識化」の過程であり、構造的暴力の存在を認識して、内面化された構造的暴力を克服する手段であり過程であり、コミュニケーションであるともいえるのである。

しかしながらラグランハ周辺の多くのアシェンダでばらばらに抑圧されてきた人びとにとって、彼らを抑圧者するエリート、地主や軍といったものはもとよりたとえようもなく巨大な存在であって、各個ばらばらに対抗しようとしても立ち向かえる相手とは考えられない。したがって暴力と抑圧の歴史を認識した人びとは、次にその認識（歴史）を紡ぎだす主体として、さらに外部の同じような立場にある人びとに向かってその認識を伝え合い、共闘を募り、構造的暴力を共闘者とともに「はさみうち」することをめざすコミュニケーションによって、変革のための集団的主体を形成するのである。人びとはカルバリヨをとおして自分たちの認識を地域の中だけでなく外部にまで広めることによって共闘を募っているのだ。

カルバリヨは、自分たちの歴史や現状を語る言葉を奪われ、アジェンダで個々に分断されて支配されてきた民衆が、みずからを取り巻く状況（苦難）は変革可能であることを認識するとともに、そのための共闘を呼びかける言葉を取り戻す意識化の過程である。「世界を変えようとする『性向』のようなもの」³⁰を共有する集団的主体によって、エリートによる経済開発の利益を守るための軍事化という開発主義の暴力を克服する具体的行動がはじめられた。まさにそれは開発主義から脱却し民衆の平和をめざすコミュニケーションであるといえる。また人びとの命と暮らしを守る BCC 運動の中で、それは持続的な生存の基盤＝サブシステムを守るコミュニケーションともいえるのである。

5 民衆の自立自存の運動

(1) SVF での BCC 活動の経緯

ヴィック神父が SVF の司祭であった 1985 年に同地でも BCC の組織化がはじまった。人びとが宗教を核として自分たち自身の命と暮らしを守る共同体である。その高い組織力と活発な活動のために、1989 年、同地はバランゴンバナナの日本との民衆交易の拠点とされた³¹。テレンス司祭着任後、バナナ生産と共に BCC 運動もますます隆盛となった。

カルバリヨを含め、年間を通したさまざまな活動には、青年層のみならず小教区全体の老若男女が無報酬でさまざまな役割をもって関わっている。小教区全体と青年組織のそれぞれに、小教区内の地区代表による委員会の他、司祭とともにミサの進行を行なう典礼委員会、財政委員会、教育委員会、組織委員会、国際連帯委員会から音楽委員会等々までが組織され、信仰を持った人びとの集まりとしての教会が多くの人びとの日常生活の中に深く組み込まれている。とくにカルバリヨのためには特別な実行委員会が設置され、実施のための運営、財政、広報、記録、輸送、通信、保安、食糧、保健、宿泊、調達、典礼から制作、音響照明に至るまで信徒の総力を挙げて参加、協力、実施する体制がとられている。信徒のすべての人びとが何らかの形で直接的にカルバリヨ実施に参加するのである。

一方このような小教区や青年組織の活動は、NFSW や農民運動の活動や弾圧の歴史を身近に見ながら育ったナイーブな青年層、また学校を卒業してもなかなか就業機会が得られない青年層にとって薄給でテンポラリーとはいえ貴重な仕事であり、また打ち込める活動の機会にもなった。マルコス戒厳令体制下では唯一合法的に民衆が集まる場であった教会を中心とする活動、とくに BCC の活動が、軍や国家権力、あるいは大地主の側からは、イコール NPA³²であると見られてきた歴史を無視することはできない。つまり、民衆が自分たちの問題を自分たちで考え、自身の組織化を行なっただけで、既得権益を持つエリート層からは国家に弓引くことだと刻印されたのである。

1992 年に始まるフィリピン共産党分裂による NPA の影響力低下などから、ラモス政権（1992～98 年）時代に入って、国軍による民衆への軍事化の圧力は顕示的なものから次第に表面からは見えにくいものへ、軍による直接的ハラスメントは犯人不詳の政治的殺害へと変化していった。一方 1994～95 年、病虫害により SVF 小教区でのバナナ生産が壊滅。生産から輸出までの活動の基礎となった BCC 運動に大きな影響を与えた。さらに共産党分裂が民衆運動にも少なからぬ影響を与えるなか、1998 年にテレンス神父が離任。その頃から、カルバリヨも次第にかつての青年の自主的な文化運動の息吹が失われ、単なる年中行事、伝統行事と化しつつあるという声が地元の関係者の中から聞かれるようになった。

一方、テレンス神父離任後、同地では 6 年間に 6 人もの司祭が着任・離任を繰り返す不安定な状態が続いた。

(2) 具体的な変化

開始から 20 年が過ぎた頃から、カルバリヨにはそこそこの観客が集まっても、BCC の地域での活動は後退が指摘されるようになった。以前行なわれていたパニンバホンや、BCC の保健プログラムは行なわれておらず、地域の末端ではオルガナイザーがこないので特段の青年活動もない。経済のグローバル化が進展するなか、都市へ、マニラへ、国外への出稼ぎによる流出が増えて青年コアメンバーの入れ替わりが激しく、カルバリヨ参加者が青年というよりも少年少女

がほとんどになってしまった。日常的な青年活動の不在のため、地域の青少年の多くにとって直接関われる教会青年活動がカルバリヨだけになってしまい、その準備や練習のなかで世代間に継承されてきた BCC 活動としてのカルバリヨの意味を若い世代に伝える教育やコミュニケーションの機会が少なくなってきた。遠方のアシエンダから夜間練習に来る若者をラグランハの信徒が交代で宿泊させることから若者たちの食事を作ること等々、ほとんどの信徒が何らかの形で直接参加協力していたカルバリヨから、寄付金を求められるばかりのカルバリヨへの変化である。

一方そこで伝えられてきたテーマを見てみると、1996 年「フィリピン 2000 計画は貧富の格差を拡大する」、1997 年「グローバリゼーション、輸入自由化、石油規制緩和と民営化」、といったものから 2004 年「クリスチャン家族再生への種」、2006 年「クリスチャン家族再生の果実」のようなものへと変化しており、長年カルバリヨに関わってきた活動家の中には、社会的公正を問うものから、家族や個人の利己主義ばかりを強調するものへテーマが変質していると指摘する声³³もある。

貧困層より富裕層を、人びとが集うことよりお金を集めることを志向する司祭（2004～2006 年在任）が着任してからは、パニンバホンはなくなり、助け合いもなくなって、BCC は名前だけで実態が存在しなくなった。献金は最低 20 ペソと決められては教会に行けない³⁴信徒も多い。小教区におけるコミュニケーションから、脱開発コミュニケーションの要素が減少し、ヒエラキカルな開発コミュニケーションの要素が増加したのである。

問題は司祭にあるのではなく人びとの中にあるという声もある。寄り合いを開こうとしても人が集まらない。人びとがただ食うことに忙しすぎる。周りに 1 日 1、2 回しか食事できない人がたくさんいる。祈りだけでは食えない。日本との民衆交易によって人びとに利益をもたらしたバナナ生産が盛んなときには多くの人びとが BCC 活動に参加したが、バナナが病虫害で壊滅したら集まらなくなった³⁵というのだ。

フォルティッチ司教の後任³⁶からバコロドにおける教会の保守回帰が始まったが、一方、BCC 活動に積極的な神父や信徒リーダーの間には、金持ち・権力

者志向の司祭が着任しても、信徒のリーダーが良く訓練されていれば BCC 活動は継続できるという意見³⁷もある。

6 民衆運動の主体は誰か？

(1) 変化の要因

変化の外的要因としては、直接的にはカトリック教会の保守回帰、もしくは SVF 小教区司祭が民衆よりも富裕層や権力者を志向した神父にかわったことが指摘される。バコロドの聖ラ・サール大学社会研究開発センター (ISRAD) 所長のヴィオレータ・ゴンサガ博士 (Violeta Gonzaga) はフォルティッチ司教離任わずか 2 年後の 1991 年には既に「1980 年代中期のネグロスであればほど蔓延った飢餓と窮乏は最早どこにも見られない。・・・(中略)・・・経済成長は貧困層の社会動員力を奪ってきた。経済的生き残りに熱中することで、貧しいネグロス人は好戦的な軍隊と闘うことはもちろん、社会的異議申し立てをますます厭うようになっている」³⁸と述べた。一方で「教会は人権尊重、真正農地改革、農地紛争の積極的非暴力解決を唱道し続けなければならない。なぜなら保守政治家や政治的『名門』復活の兆しがあるからだ」と、教会が政治において活発な役割を担うことで、民衆、特に貧困層のパトロン政治³⁹からの引き離しを先導する必要があるとしている。

さらに人びとに内在する要因を考えると、教会や司祭、政治組織、NGO など外部からの指導や支援に対する精神的・経済的依存がある。

軍事化は開発の利権を守るという意味で開発主義の最たるものだが、これに対抗する側も民衆の動員を図り、その手段の一つとして日本との民衆交易のためのバナナ生産のような社会経済活動が利用された。バナナ生産・交易への支援は、飢餓をもたらしていた地域経済とグローバル経済の中の構造的暴力を減少させるのではなく、増収によって暴力を潜在化させることになった。つまりバナナ生産以外に飢餓解消と生活改善の道が閉ざされていた農民は増産に駆り立てられ、病虫害という外的要因によって生産が壊滅したとき暴力が再び顕在化した。生産の拡大が民衆に幸せをもたらすとした開発主義が、バナナの過剰

生産と病虫害をもたらした。民衆と指導者双方が社会経済活動に依存するという BCC に内在する開発主義が、BCC 活動と民衆のコミュニケーションにおいても顕在化したのである。

(2) 「自分の中に敵がいる」

BCC のエリアリーダーやコーディネーターに比較的多い、地域のなかでの相対的「中間層」の人びとの生活は 80 年代と比べると「電気が来たし…」というレベルではあるがモノが増えており、その消費生活を維持し上げるための海外出稼ぎがますます一般化した。結局のところ、かつての皆貧しいけれど食べ物を分け合い、団結して暴力に立ち向かった暮らしから、携帯電話があっても寄り合いに人が集まらず、葬式ですら人が少なく神父もこないことの多い「人びとが冷たくなった」⁴⁰生活に変化したのである。

日本ネグロスキャンペーン委員会 (JCNC) ネグロス駐在員の大橋成子氏が、農地改革で土地を手に入れて組織された生産者協会農民の寄り合いでの話をレポートしている。「地主がいた時は団結できた。敵がはっきりしていた」「同じ低賃金で苦勞している時は、仲間意識も強かったけど、土地闘争が終わって、これから皆でこの地域を発展させよう、という時になるとなぜそっぽをむくんだ」「昔、敵は外にいた。軍隊も地主も顔の見える敵だった。でも今、おれたちの敵は自分自身の中にあると思う」「農園の監督官の指令で働いたり、リーダーの指導で労働運動していた時代は終わったんだ。外の敵を批判してストに入ると、自分の中に敵がいる闘いは全然違う」⁴¹という。

つまり、かつて国家や地域のエリートによる開発主義とその暴力（軍事化）に立ち向かったときには団結できた人びとが、わずかながらも直接的暴力の脅威が減少して、次に自分たち自身で道を選択しようとしたときに、今度はグローバル経済のなかで各個人の経済的利益を最優先させる新たな開発主義にとらわれてしまい、人びとはふたたび分断されてしまっているのである。

(3) 民衆と指導者

SVF 小教区における BCC 活動の最盛期に在任し、現在のかたちのカルバリヨ

を始めたときの司祭というキーパーソンであるテレンス神父が、2008年5月に神父叙階25周年の儀式をSVF教会で行なうため、異動先のオーストラリアから戻ってきたところをインタビューできた。

テレンス神父が神学生であった当時、ネグロス島南部におけるBCCのパイオニアであるコロバン修道会に支援された小教区からきていた彼のような神学生は、休暇の時には集まってBCCのある小教区でエクスポージャーを行ない、「今よりもっと一触即発だった当時の状況において、教区のイニシアチブによる山村でのパイオニア・プロジェクトであるカイサハン・セツルメント（一種のキブツのような共同体）などさまざまな活動に関わることから、それらのプロジェクトの正義や解放の側面が自分たちにしみ込み、自分たちの志向を発現させた」⁴²という。しかし、彼がラグランハに着任して以降の1990年代においてもこの地域は農園で搾取された多くの労働者が不満を持たざるをえない危機的状況にあり、まだ25歳と若かった彼が「単に司祭として尊敬されるのではなく、自分の存在をその地に刻み込んでいき、人として近づける、親しくなり、信用されるまでには2年かかった」のであるが、一方の信徒たちも「初めはテレンス神父を怖い人だと思って距離をとっていた」⁴³と述べているのに符合する。

神父は貧しい教区の中でキリスト教共同体のオーガナイザーたちが自立自存できるようにDemo Farmと称する農場を安定した水源もなく、急斜面の土地に拓いた。人びとの大部分である貧農たちがもし使える土地を得たとしても同様の傾斜地であり、そこで耕作する彼らのスタイルの実践を通して彼らを支援したのである。それは小さな共同体が人びとの生活するさまざまな場において教会を活性化させるというBCCのあり方に通じる。

それはまた伝統的な教会の階層的なリーダーシップを脅かす概念でもある。人びとはBCCによって共有されたリーダーシップを享受している。テレンス神父は司祭が王となり小教区が彼の王国ともなりうることを認めつつ、「BCCの精神においては、司祭に重要な役割があることが認められる。しかしそれは王ではない。権力ではなく、人びとを力づけることが役割だ。司祭は独裁者としてより励ます者として知られる。人びとが力を持ち、責任を持てるように力づけるのだ。だからBCCはある種『下からの教会』『貧者の教会』であり、そこ

でのリーダーシップとは参加的（participative）なものだ」と述べた。

つまり第一に階層的なカトリック教会の司祭として上から小教区の信徒を指導する存在としての側面と、第二にみずからのすべてを信徒の前にさらけ出すことを通して人びとにその可能性を示し勇気付ける民衆のコミュニケーターとしての側面という二つの要素がテレンス神父には内在した。神父自身が第一の側面を意識的に無化したことから小教区の信徒はリーダーシップを共有した。さらに暴力を克服する自力更生の営為を通して社会経済的な力を共有したことによって民衆自身が神父の第二の側面を促進したのである。

先述のようにカルバリヨは観客数を増やしながらかも BCC 運動にもとづく連帯を求めるコミュニケーションは低調になっていった。テレンス神父は「教会が一般的にはまだヒエラキカルであることは認めざるを得ない。支配的なものに対抗する新しい概念に従うことは大変なプレッシャーを受けることであり、困難なのだ。進歩的とか、金持ち志向に対抗する貧者志向を語るときの大前提は、新しい気づきや方法、ライフスタイルを受け入れる私たちの能力と、一方でただ安逸に生きるために権力を保持しようとする性向（快を求める主流のライフスタイル）の両者の間に常に緊張関係が生じることだ」と述べている。神父だけでなく SVF の民衆もまた自身の開発主義との緊張関係のなかにいるのである。

7 おわりに

BCC 活動の盛衰が小教区司祭個人の志向にある程度左右されることを否定はできない。とはいえ保守的な司祭が着任したときも活動的信徒が一方的に耐えてきたわけではない。1998 年から 8 年間に 6 人もの司祭が交代した背景には、信徒による司祭の首のすげ替えという要素もある。テレンス神父と民衆のコミュニケーションの事例からも読み取れるように、人びとは教会や指導者に一方的に依存しているのではなく、信徒の側からも自分たちのコミュニケーターとして司祭を鍛え育てていく相互関係が存在することがわかった。

開発主義の利益を守る軍事化に対して、SVF のカルバリヨには連帯や共同性

の構築によって持続的、長期的に平和にいたる志向をもったコミュニケーションがたしかに存在している。しかし開発主義はその BCC 運動のなかにも存在し、経済のグローバル化は青年を地域から追い出し、拡大する経済格差は民衆の中にも亀裂を生じさせ、コミュニケーションのなかにヒエラキカルな暴力コミュニケーションのベクトルを増やそうとしている。

暴力の被害者が意識化して自力更生を行おうとするところに脱開発（平和）コミュニケーションは存在する。しかし、そのコミュニケーションにも開発（暴力）コミュニケーションのベクトルは内包されており、それを少しでも減らすことが暴力を克服し平和を実現する過程なのである。

¹ 「フィリピンではクリスマスとともに、この聖週間が重要な年中行事。主イエスの受難と死、そしてその復活にまつわる物語を、教会のミサを中心に、受難の詩『パシオン』の朗読やそれを演劇にした『セナクロ』などを通じて追体験する。また日頃に犯した罪を購うために裸足による巡礼やむち打ち苦行などに参加する住民も多い。聖木曜日と聖金曜日が祝日に定められており、翌日の土曜日と復活祭の日曜日を併せて普通 4 連休となる」（『まにら新聞』ウェブサイト「フィリピン歳時記」http://www.manila-shimbun.com/saijiki_3.html、2010 年 8 月 15 日閲覧）。

² Calvary（キリストが磔刑されたゴルゴダの丘）を語源とする。

³ 「conscientization」：ブラジルの教育学者、識字教育実践家パウロ・フレイレに定義され、広まった概念。自分たちのおかれている状況を「信号の受け手ではなく認識主体として人間が、みずからの生活を定めている社会文化的現実と、その現実を変革するみずからの能力とを深く自覚する過程」を経て現実の変革へ至るといふ。（パウロ・フレイレ著、小沢有作・楠原彰・柿沼秀雄・伊藤周訳『被抑圧者の教育学』亜紀書房、1979 年、59 頁）

⁴ 国家や地域エリートの利益を守る国軍の暴力

⁵ Reynaldo Clemena Iletto, *PASYON AND REVOLUTION: Popular Movements in the Philippines, 1840-1910*, ATENEO DE MANILA UNIVERSITY PRESS, 1979.

ルーベン・アビト「カトリック教会と植民地支配—19 世紀フィリピンの抵抗運動を視座において」ルーベン・アビト、山田経三編『フィリピンの民衆と解放の神学』、明石書店、1986 年。

清水展『文化のなかの政治』弘文堂、1991 年。

⁶ Ivan Illich, “Peace is a Way of Life” in *Resurgence No. 88*, September/October 1981, pp. 17. 日本語訳はイバン・イリッチ著、大西仁訳「平和とは何か—暴力としての開発」坂本義和編『暴力と平和』朝日新聞社、1982 年、12 頁による。

⁷ C. Douglas Lummis, “Development against Democracy” in *Alternatives: Social Transformation and Human Governance* 16, no. 1, Winter 1991. この他の論文を合せて改訂し、*Radical Democracy*, Cornell University Press, Ithaca NY, 1996 が出版された。日本語版は、C.ダグラス・ラミス著、加地永都子訳『ラディカル・デモクラシー—可能性の政治学』岩波書店、1998 年。

⁸ 同書、103 頁。

⁹ 同書、104 頁。

-
- ¹⁰ 同。
- ¹¹ 横山正樹「開発主義の近代を問う環境平和学」郭洋春・戸崎純・横山正樹編『脱「開発」へのサブシステム論』法律文化社、2004年、9頁。
- ¹² ユルゲン・ハーバーマス著、河上倫逸・M.フーブリティ・平井俊彦訳『コミュニケーション的行為の理論（上）』未来社、1985年、31頁。
- ¹³ 「教育は、エクステンション（普及）か、コミュニケーション（伝えあい）かのいずれかを志向するものであり、そのいずれかを志向するかによって、それは支配の行為ともなれば、解放の行為ともなりうる」（里見実「序 意識化と対話の統一をめざして」）パウロ・フレイレ著、里見実・楠原彰・桧垣良子訳『伝達か対話か一関係変革の教育学』亜紀書房、1982年、9頁。
- ¹⁴ 中南米の解放の神学とともに起こった「共に祈り礼拝し、自分たちの状況を共に解決し、問題に直面した時には互いに支え合う自助自立のキリスト者のグループ」（フリオ・ラバイエン「民衆の叫び声」ルーベン・アビト、山田経三『フィリピンの民衆と解放の神学』明石書店、1986年、62頁）である。バコロド地区では'Preferential Option for the Poor' (New way of being church, Church of poor) として知られる。
- ¹⁵ 1581～1586年に行なわれた、カトリック司祭らによる「マニラ会議」でフィリピン群島に対するスペインの宗主権を正当化した。（前掲、アビト「カトリック教会と植民地支配」15～17頁）。
- ¹⁶ op.cit, lleto, pp. 1-27.
- ¹⁷ アビト前掲論文、19～21頁。
- ¹⁸ フィリップ・ベリマン著、後藤政子訳『解放の神学とラテンアメリカ』同文館、1989年、13頁。
- ¹⁹ 1968年、ラテンアメリカ司教協議会第二回総会。
- ²⁰ 民衆の中で実践することが福音そのものであるとする神学運動。
- ²¹ Bishop Antonio Y. Fortich、1967～1989 在職。
- ²² ミサの前半、神の言葉を教える部分である「言葉の典礼」を信徒の礼拝奉仕によって行なう。神父がなかなか訪ねられない遠隔地でも信徒自ら行なえる「司祭のいないミサ」。現地の言葉によって行なわれ、聖書の特定箇所を現実生活の中に文脈化（contextualize）して学び合うことが特徴。
- ²³ ニアール・C・オブライエン著、大塚佐太郎・大河原晶子訳『涙の島 希望の島—ネグロスの人々とある神父の物語』朝日新聞社、1991年、215頁。パニンバホンは1966年からコロンバン会に属するオブライエン神父らによってはじめられた。
- ²⁴ 同書および Fr. Romeo E. Empestan 'BRIEF HISTORY OF THE CHURCH OF NEGROS', Diocese of Bacolodo, May 2003 による。
- ²⁵ ラグランハのあるネグロス島に隣り合うセブ島、パナイ島などからやってくる季節労働者。封建的荘園制の遺制を残す農園（アシエンダ）で、劣悪な労働条件の下で働いている。
- ²⁶ 「ともに分かち合う」クリスチャン・コミュニティの社会経済運動。
- ²⁷ op.cit, Empestan, p. iii – p. v.
- ²⁸ 「権力者が権力者であるための前提条件として、かれらはきまって、ある一つの権利を絶対化しようとします。それは、権力なき者のプロフィールを描き、かれらを勝手に叙述する権利です。こんなふうにして、権力をもつものが権力を持たざる者の肖像を描き、後者がそのプロフィールを実際に体現してしまうなら、描いた権力者の権力がいっそう強化されることは明白です」（パウロ・フレイレ著、里見実訳『希望の教育学』太郎次郎社、2001年、214頁）。

²⁹ フレイレの定義する人間＝「発話する交信的存在」が「自分の置かれている現実を分析する過程のなかで、自分のこれまでの歪んだ認識を自覚することによって、新たな現実認識に到達する」(パウロ・フレイレ著、小沢有作ほか訳『被抑圧者の教育学』亜紀書房、1979年、139頁)。

³⁰ フレイレ『希望の教育学』202頁。「世界についての知的な視野が開かれれば」「自分の中にうまれてくるはず」のものであるとフレイレはいう。

³¹ ラグランハにおけるバナナ生産の盛衰の経緯については、伊藤美幸「フィリピン・バナナ村の歩み」戸崎純・横山正樹編『環境を平和学する！―「持続可能な開発」からサブシステム志向へ』法律文化社、2002年、153～162頁を参照。

³² **New Peoples Army**＝新人民軍、フィリピン共産党軍事組織。

³³ 2004年4月10日、前年までのカルバリヨの中心メンバーのA夫人に筆者がインタビュー。

³⁴ 2004年11月16日、テレンス神父の元秘書B夫人に筆者がインタビュー。

³⁵ 2004年11月16日、小さなサリサリストア(よろずや)を営むC夫人に筆者がインタビュー。

³⁶ **Bishop Camilo D. Gregorio (1989-2000), Bishop Vincent Macanan Navarra (2001-)**。

カミロ司教最初の仕事は、強制立ち退きの暴力から神学校に避難していた住民の強制退去。緊張関係が始まり、わずか11年後に司教はセブ島へ異動した。

³⁷ 2005年3月31日、バコロドBCC活動家E氏への筆者インタビュー。他、エンペスタン神父らBCC活動に積極的な神父らの意見。

³⁸ **Gonzaga, Violeta Lopez, 'Negros church Must Remain as Catalyst for Social Change', *Katilingban Vol. 5 No. 2, September 1991, p. 7*** (筆者訳)

³⁹ 地主層「旦那」と貧困層「店子」との間のがんじがらめの関係。

⁴⁰ 前掲B夫人インタビュー。

⁴¹ 大橋成子『『70年代』―アジアのムラから見た《世界》⑩』『季刊ピープルズ・プラン28』ピープルズ・プラン研究所、2004年11月、160頁。

⁴² 2008年5月21日、テレンス・ヌエバ神父に筆者がインタビュー。注の無いインタビュー引用は以下同。

⁴³ 前掲B夫人インタビュー。